

MILK CELEBRITY

ミルクセレビィ

エロカワ美女たちのにゅ〜わく

立ち読み版



小説 神崎美宙
挿絵 悠木しん

ま み や ゆかり
真宮紫

真宮家の三姉妹の次女。真宮家が所有している会社をいくつも経営するキャリアウーマンである。



アタシを選んでくれたら
イイコトしてあげる

ま み や か す み
真宮香澄

真宮家の当主を務める女性。三姉妹の長女で、すでに結婚して娘を産んでいるが、夫とは死別している。



私のミルク……
搾ってもらえないかしら？

登場人物紹介

Characters

まみや
真宮アンナ

香澄の娘のお嬢さま。正也と同級生になる。男にミルクを搾られるのは少し恥ずかしいようで……？

アンナは男なんかと仲良くしないからねっ!!



まみやあやか
真宮彩花

大学に通っている三姉妹の三女。歳の近いアンナの勉強を見てあげたりしている。

わたしのことはお姉さんだと
思ってくださいね



えんどうまさや
遠藤正也

真宮家に下宿することになった男の子。真宮家の女性の体質を知り、ミルク搾りを頼まれることに。

序章	
第一章	お仕事はミルク搾り
第二章	エッチなご褒美
第三章	抜け駆けご奉仕
第四章	豊満セレブボディとミルクおっぱい
第五章	お嬢様大ピンチ
第六章	セレブたちのにゅ〜わく
終章	
	250
	214
	174
	132
	091
	052
	025
	007

「きゃっ！ す、すごいです……こんなにたくさん……」

勢いよく放たれた白濁液はビチャビチャと彼女の手や股間の辺りに降り注いだ。少年の興奮を物語るように吐き出された精液の量は多くて粘り気も強く、ムツとした蒸れた匂いを漂わせる。

「はあはあ……す、すみません……手を、汚してしまつて……」

「いいえ、謝らないでください。正也くんも感じてくれて、嬉しいですから……」

手を牡汁で汚されたというのに、黒髪少女は嫌がるどころか少年を射精に導き満足げに微笑んでいた。

おっぱいを揉んでミルクを搾るだけでなく、お返しに気持ちよく射精させてもらったおかげで心地よい疲労感が全身を包み込む。こんなお礼を受け取ってしまうと、また次も彩花のミルクを搾りたくなってしまう。

（はあ……気持ちよかつたけど、これからまた大変なことになりそう……）

香澄と紫のどちらのミルクを搾るかで毎日大騒ぎなのにそこに彩花まで加わり、ますます贅沢な悩みに頭を抱えることになった。

正也は目の前の美巨乳をしゃぶりながら心の中でため息をつく。

「どうですか、気持ちよかつたですか？」

彩花は自分の手だけでなく、白濁液で汚れたペニスや股間の辺りまでティッシュで綺麗

に拭きながら微笑みかけてくる。

メイド服を着ていることもあり、本当に主人に奉仕するメイドさんのようだった。

「とつても気持ちよかったです……彩花さんも胸の方は楽になりましたか？」

「はい、さつきまで結構張ってたんですけれど……今は正也くんのおかげですごく楽になりました。ありがとうございます……姉さんたちが夢中になるわけですね……」

途中から手コキの快感に翻弄されてしまい、ミルク搾りをちゃんとできていたか不安だった。彩花は喜んでくれたみたいだ。コスプレまでしてミルク搾りをおねだりしてきた彼女の期待に応えられて、ホッと一安心といったところである。

しかし黒髪少女はなぜか乳房を隠すようにそつと手のひらで包み込んだまま、メイド服の胸元を直そうともしない。

「どうしたんですか、着替えないんですか……？」

「ええ、そうなんですけど……でも正也くん、まだ満足してませんよね……」

そう言いながら彩花はジツと見つめてくる。その視線の先にはむき出しになったペニスが射精したばかりだというのに、ギンギンにいきり勃っていた。

「あ、いやっ……これは、すみません……」

慌ててズボンをはこうとしたが、メイド少女はその腕を掴んで少年の動きを制する。

「待ってくださいっ！ 謝らないでください……」

そしてその手を掴んだまま長い黒髪を揺らして覆いかぶさってきた。不意をつかれた正

也はソファの上に押し倒されてしまう。

「えっ、彩花さんっ……?」

突然の出来事に驚き目を丸くする少年の顔を、彩花は真剣な表情を浮かべてジッと見下ろしてくる。

「あの、わたし……正也くんが満足するまでご奉仕しますから、明日からもわたしのお相手をしてくださいね……」

そう言いながらメイド服姿のお姉さんはスカートの中へと手を忍ばせると、モゾモゾと腰をうねらせながら片足ずつ動かしてブラジャーとお揃いの白いショーツを抜き取った。そしてその薄布がパサリと床に落ちる。

つまり彼女は今ノーパン状態というわけだ。それが何を意味するのか混乱する頭の中にボンヤリと浮かんでくる。

「もう姉さんたちとセックスしたんですか……?」

返事をしようとしたが声が入り出せず、正也は無言で首を横に振った。

「そうですか……もしかして、セックスは初めてですか?」

今度は首を縦に振る。

すると彩花は嬉しそうに目を細めた。そしてゆっくりと口を開く。

「……本当ですか? じゃあわたしが正也くんの初めてになってもいいですか?」

異性に童貞だということを告白するなんて恥ずかしいはずなのに、今はそれどころでは

なかった。

予想外の展開に思考がついてきていないが、何とか声を絞り出す。

「で、でも……それはっ……」

「わたしが相手では嫌ですか？」

「そうじゃないですけど……でも、彩花さんはいいんですか？」

手コキをしてくれただけでなく、セックスまでさせてくれると言い出した。それは童貞少年には願ってもない提案だったが、簡単に受け入れていいものか悩んでしまう。

「はい、正也くんが望んでくれるなら喜んで……それにわたしもミルクを吸われてるうちにエッチな気持ちになってしまいましたから……」

彩花は少年の頬にそつと手を重ね、優しい笑みを浮かべながら顔を近づけてくる。

長い黒髪がはらりと垂れて甘い香りが鼻腔をくすぐったかと思つた次の瞬間、唇が柔らかい感触でふさがれた。

（んっ……こ、これってっ!!）

キスをされたことに気づき、少年は思わず目を剥く。まさか憧れていたファーストキス体験がこんな形でやってくるとは予想もしていなかった。

キスより先にパイズリヤ手コキを味わっているのがおかしな話ではあるが、とにかく正也にとっては生まれて初めてのキスだ。

「ちゅ……んっ、正也くん……んふ、ちゅううう……」

さらにメイド服のお姉さんは唇を強く押し付け、唾液をたつぷり含んだ柔らかい舌先を突き出して正也の舌を搦め捕り、熱い接吻を続ける。

(はああ……キスってこんなに気持ちいいんだ……)

口内を他人に舐められるという初めての出来事に面食らうが、美少女の生温かい舌が這い回る度にその部分が蕩けてしまいそうなほど気持ちいい。おっぱいを揉んだり手コキをされている時とは違う、胸が温かい気持ちで満たされていくような心地よさだ。

「……ぶはあ、彩花さん……」

呼吸を忘れてしまうような激しいキスのおかげで頭がボーっとしてしまい、もう目の前の黒髪少女のことしか考えられなくなっていた。

「ふふ……わたしに任せてください……」

少年の股間に馬乗りになった美少女は身体を起こすと、ゆっくりとスカートをめくり上げていく。

雪のように白い太ももが露わになり、髪と同じく漆黒のアンダーヘアが目の前に晒される。ミルクを搾られているうちに興奮していたのか、サーモンピンクの大淫唇は蜜でしつとりと濡れていた。

(あ、彩花さんのおマ○コだ……すごい、綺麗だ……)

動画や画像で見るとは違う本物の女性の下半身に、思わず生唾を飲み込む。

「わたしも初めてですけど、頑張りますから……」

彩花は人差し指と中指で自らの大淫唇を広げると、反対の手で勃起した逸物を持って固定し先端をワレメへと導いた。

左右に広がった淫裂に目を奪われ聞き逃しそうになったが、サラリと彼女がとんでもないことを口にしたことに気づき目を丸くする。

「え？ 彩花さん……初めてつて……ええっ!？」

しかしメイド服姿のお姉さんは返事をせずに、ゆっくり腰を下ろしていく。

ズブツ、ズニュウウツ……!!

「ンはああ……正也くんが、わたしの中に入ってきますっ……」

そう言つて熱っぽいため息を漏らす美少女だが、さすがにいきなり挿入するのは難しいらしく、腰の動きはすぐに止まってしまふ。

「ちよ、ちよつと待つてくださ……あ、彩花さんつ……」

敏感な亀頭が熱く濡れた膣口の粘膜と密着している。それだけでペニス溶けて彼女の身体と一つになってしまふような錯覚を感じた。

「すみません……あ、あんっ……すぐに、全部包んであげます、から……」

それでも彩花は何とか腰を沈めようとするが、痛みへの恐怖なのか膝が小さく震えている。さすがに見ていられなくなつて彼女の手を掴んだ。

「彩花さん、無理しなくていいですから……」

「はい、心配してくれてありがとうございます……でも大丈夫ですから……」

しかし彩花は目尻を潤ませた泣き笑いの表情を浮かべながらもゆっくりと挿入を再開する。じわじわといきり勃つ逸物は熱く濡れそぼった淫肉の中へと沈み、敏感な亀頭が熱い膣肉の締め付けを受けて股間に甘美な痺れが流れ込んできた。

「うっ、あああつ……彩花さん、ううっ……」

「あ、ああっ！ 正也くんが挿入はいつてきますっ……つつ、い、痛う……」

甘い声を上げる彩花だったが、眉間にシワを寄せ肩を震わせている。その反応が何を意味するかは女性経験のなかった少年にでもすぐに分かった。

「ど、どうして……」

初体験の喜びに浸っている余裕もなく、正也は目を丸くしながら彩花を見つめる。

「だって胸では姉さんたちに勝てませんから……わたし、正也さんに気に入ってもらいたくて……もつとエッチなご褒美を……あげたかったです……」

「そ、そんな……ご褒美って……」

「真宮家の女性にとつてミルク搾りをしてもらうことはそれだけ大切なんです……それにわたし……正也くんになら処女をあげてもいいって思ったんです……」

泣き笑いのような表情を浮かべながら彩花はそのまま腰を沈めていき、ついにペタンとヒップが股間と密着し、勃起ペニスは全て膣内へと埋まった。

愛液で濡れた処女肉は逸物を食い千切らんばかりに絡み付いてくる。彼女の膣は全体的にツルツルとしているが、上の方だけザラザラとしていてその部分がペニスと擦れるとか

なり気持ちいい。しかも激しい締め付けのおかげで挿入しただけだというのに思わず射精してしまいそうなほど極上の膣肉だった。

「それに今はメイドさんですから、いっぱいご奉仕しますので……正也くんは、気を遣わずに楽しんでください……」

破瓜の痛みもまだ癒えていないだろうに彩花はにっこりと微笑むと、両足を踏ん張ってゆるゆると腰を動かし始めた。

キツくしゃぶりついてくる膣肉からズブズブと逸物が吐き出され、蜜で濡れた竿の根元が空気に触れる。しかしすぐに再び熱い膣内へと呑み込まれてしまう。

グチュ、ヂュ、ヂュツ……ズチュ、ズチャ、ズツチャツ！

「うあつ、ああつ……彩花さんっ……」

何か言わなくてはと思うが、性快感に慣れていないペニスが熱い膣壁で扱かれ、股間が蕩けてしまいそうなほど気持ちよくて全身に力が入らない。

「あ、んっ……気持ちいいですか、正也くん……」

ゆるゆると細い腰を揺らしながら彩花が顔を覗き込んできた。メイド服に包まれた肢体が刻むストロークは緩やかだが、膣肉の締め付けは相変わらずキツくて少しでも気を抜けばそのまま射精してしまいそうなほどの快感が広がる。

「は、はい……気持ちいいですけど、彩花さんは……大丈夫ですか……」

「大丈夫、です……想像してたよりは少し痛かったですけど……でも姉さんたちじゃなく

て、わたしが正也くんの初めてになれて嬉しいんです……」

荒い呼吸を繰り返していた彩花は微笑みながらそっと抱きついてきた。

ミルクを滴らせていた乳房が胸板にむにゅっと押し付けられ、柔らかな感触と心地いい温もりが伝わってくる。

「ですから、正也くんも……わたしの中でいっぱい気持ちよくなってくださいね……」

「あ、ああっ……彩花さんっ……気持ちよすぎて、僕っ……」

熱を帯びた息を吐きながら耳元で囁く仕草は色っぽくて、情けない声を漏らす少年とは反対に彩花は同じ初体験同士とは思えないほど大人びていた。

そしてDカップほどの美巨乳を押し付けたまま再び腰を上下に揺らし始める。

ズツチュ！ ズツチャ！ ズツチュ！ ズツチャ！

「あん、ああんっ……わたしも中が正也くんでいっぱいになって……はあん！」

身体を密着させているのでそれほど大きな律動は刻めないが、それでもスベスベとした熱い膣肉に扱かれ、ペニスは爆発寸前だった。

（うう、セックスって、こんなに気持ちいいの!? こ、こんなの我慢できないよっ！）

いくらなんでも挿入しただけで射精してしまっただけはカッコ悪すぎる。菌を食いしぱり、込み上げてくる衝動に必死に抗った。

しかし今まで経験してきた手コキやパイズリとは気持ちよさが全然違う。しかもお互いの性器を擦り合わせて快感を共有しているという喜びがさらに胸を高鳴らせた。おかげで

逸物はさらに硬くいきり勃ち、うねる処女肉を圧迫しパンパンに張ったカリが膣粘膜と激しく擦れた。

「ンッ！ はう、んっ……ま、また大きくなりました……お、奥が擦れて……はんっ、わたしも感じてしまいますっ……」

彩花の喘ぎ声のトーンがより甲高いものになる。激しく性器同士が擦れて感じるのは男も女も同じ。膣内からはドバドバと愛液が溢れ、まるで粗相をしてしまったかと思うほど二人の股間を濡らしている。

ただ感じすぎて力が入らなくなったのか、彩花は少年の身体に抱きついたまま荒い呼吸を繰り返していた。

「ま、待つてくださいいね……ちゃんと動きますから……」

それでも何とかりードしようとメイド服姿のお姉さんは両手で上半身を支えながらよろよろと起き上がり、腰を振ろうと足を踏ん張っていた。

「はああん！ あ、当たってますうっ……深い、こんなに深いところまで……ンン、あ、いい……」

しかし騎乗位の体位になると自然と挿入は深くなる。限界まで勃起した逸物がズッポリと処女肉を貫き、彩花は余計に動けなくなってしまうていた。

あの上品でおしとやかな大和撫子然としている彩花がメイド服コスプレで自分の股間に跨り、おっぱいを丸出しにしながら快感で身悶えしている。オナニーでは味わったことの

ないほどの興奮を感じ、全身の毛穴が開いて汗が吹き出てきた。

「す、すごい！ 彩花さん、エロすぎるっ……」

目の前で揺れている巨乳の誘惑に堪らなくなり、思いつきり驚つかみにする。

「ああん！ ま、正也くんっ……今、胸を触られたら、ミルクがあっ……んっ！」

軽く揉んだだけで彩花のおっぱいの先端からは白いミルクが滲んできて、タラタラと下乳の方へと滴り落ちていく。

ただ触っただけでも気持ちよかったが、セックスをしながらだと余計に興奮してしまう。ミルク搾りの時は優しくしようと思がけていたが、今はそんなことも忘れて荒々しい手つきで彩花のおっぱいを揉み搾りまくる。

「も、もう、正也くんったら……慌てないでください……あっ、はあんっ!!」

下から肉勃起で貫かれているところに乳房まで揉まれ、少女はビクビクと震えながら大きく身体を仰げ反らせていた。しかも膣肉の締め付けが強くなり、ザラつく天井が敏感なカリと激しく擦れ合う。

膣の具合がさらによくたっただけでなく、彼女も感じているのが嬉しくて正也はミルクだけでなく汗ばみしつとりと手のひらに吸い付くスベスベの乳肉を揉みしだく。

「はんっ、ああんっ……ダメですってばあ、んっ……わたしがちゃんと気持ちよくしてあげますからっ……」

肩で息をしながら彩花は何とか両手で身体を支え足を踏ん張り、大きく腰を揺らめかせ

始めた。先ほどまでとは違いキツくしゃぶりつく膣肉が激しく擦れ、一気に甘い痺れが下半身に広がる。

「くうっ！ 彩花さんっ……き、気持ちいいですっ……」

未知の快感に晒され理性を失った身体はさらなる肉悦を求め、いつの間にか正也の腰も動き始めていた。

ズツチュ！ ズツチュッ！ グチュ、グチュッ！！

「はぁあっ……あ、あはんっ！ ン、んんっ、激しいですっ！」

彼女の腰使いに合わせて下から突き上げたせいで、肉棒と膣粘膜はますます強く擦れて二人の結合部からは淫らな水音が響く。そして彩花の喘ぎ声もどんと甲高くなり、うねる腰つきは艶かしくなるばかりだった。

「あ、彩花さんっ……うう、彩花さんっ！」

いつしかメイド服姿のお姉さんのおっぱいを鷲づかみにしたまま、夢中になって腰を突き上げまくる。初セックスの快感に酔いしれる正也だったが、挿入しただけで射精してしまいそうだった童貞ペニスには刺激が強すぎた。

股間の奥から再び熱い衝動が湧き上がってくるのを感じたが、もう腰は止まらない。

「すみませんっ……もう出そう、ですっ……」

「は、はひい、いつでも……はんっ、正也くんの好きな時に出してください……」
絶頂に近いことを訴えると彩花は息を弾ませながら微笑み返してくれる。

その笑顔が男心をくすぐり、二人はさらに激しく性器をぶつけ合い、互いに高め合いながら快感を貪った。

「ああ、彩花さんっ……もうダメです！ 本当に我慢がっ……」

「は、はいっ……わたしも、ンンッ……イキそうなんですっ！」

ミルクの溢れる乳房を揉みまくりながら夢中で腰を突き上げた。その激しい責めを受けた膣肉もまるで射精を促すように、キツく逸物にしゃぶりついてくる。

汗ばんだ頬や額に艶やかな黒髪が張り付き、普段見たこともないような蕩けきった表情を浮かべる彩花。長い髪を躍らせメイド服からむき出しの乳房を揺らして快感に喘いでいる姿は堪らなくエロくて、牡の劣情をかき立てる。

「……くっ！ ああ、出るッ!!」

ついにこみ上げてくる衝動を抑えきれなくなり、正也は最後の一撃とばかりに限界寸前のペニスを膣奥へと叩き込んだ。

「はあん！ あ、ああっ、いつちやいます！ わたしも、イクっ、イクううう……」

彩花は大きく身体を仰け反らせ、長い黒髪がバサリと揺れる。

甲高い悲鳴が室内に響き、視界も白く霞んだ。

「あっ、あああっ！ で、出るっ、出ますっ!!」

ドビュビュッ！ ビュブツ、ビュル、ブビュウウウウ……ッ!!

二度目とは思えないほどの勢いで精液が尿道を駆け上がり、小刻みに収縮を繰り返す膣



内へと吐き出される。

「あひい、ンンっ……な、中に出てますっ……奥に当たって、はあああぁんっ！」

彩花は少年の手をしつかりと握り締めたまま甲高い悲鳴を上げながら全身を快感で震わせていた。おかげで肌蹴たメイド服の胸元からこぼれている巨乳も、びゅるると白いミルクを噴き出した。

生温かい液体が胸の辺りや顔にまで飛び散るが、今はそんなことを気にしている余裕はなく、むしろその甘い香りが絶頂の余韻をさらに深くする。

「ううっ……と、止まらないっ……」

一番深いところで逸物は脈動を繰り返し、吐き出された大量の精液はあっという間に腔内を満たし逆流して結合部から溢れてきた。

「はあ、んはあ……すぐ感じてしまいました……」

しばし細い肩を震わせながら達していた彩花だが、ついに身体を支えきれなくなったらしく糸の切れた操り人形のように力なく倒れ込んでくる。

心地いい脱力感に包まれ両腕が痺れたように力が入らなくなっていたが、何とかその華奢な身体を抱き留めた。

「わっと、大丈夫ですか……」

「は、はい……すみません、ちょっとフラついてしまいました……ふふ、ありがとうございます……あ、あの、正也さんはどうでしたか？ 気持ちよかったですか……？」

少年の返事が曖昧なためかお嬢様は不満げに唇を尖らせながらギロリと睨んでくる。

「い、いや、そういうわけでは……」

慌てて首を横に振って否定するが、正直なことを言うと言っていると毎日のように美人セレブたちのおっぱいを好き放題にしてセックスに耽っているのだ。これは仕事だと分かっているけど、やはりミルクを搾るだけでは物足りない。

「いいわ、分かった……アンナもエッチなご褒美をあげればいいんでしょう？」

「ええ!! エッチなご褒美って、何を言ってるか分かってるんですか……」

「あ、当たり前よ! その……だから、アンナの初めてをあげるって言ってるの……」

アンナは起き上がって正対すると真剣な表情で言い返してくる。

まさかの申し出に啞然とする正也。しかもただエッチをさせてくれるというのではなく、処女をくれると言っている。

「そんな……無理してないですか……?」

さすがに、はいそうですかと彼女とエッチするわけにもいかず、少年が心配そうに尋ねるとアンナは拗ねたようにムスツと唇を尖らせた。

「む、無理なんてしてないわよ! アンナとエッチしていいって言ってるのに嬉しくないの? おっぱいの大きさはママたちには勝てないけど、でもアンナだって結構モテるんだから……」

「それは知ってますよ……だってアンナさん学園で一番可愛いですから……」

もちろんお嬢様が美少女だということは誰もが認めるところ。そんな彼女とエッチができるなんて夢のようだが、どうしても無理をしてないか気になってしまふ。

「え？ い、一番可愛い……？ フ、フンッ、分かっているじゃない……言っておくけどこんなご褒美は誰にでもあげるわけじゃないわよ……大切な一族で、アンナの身体のことを心配してくれた正也にだけ特別なんだから……」

アンナは照れくさそうに早口でまくし立てるが、確かに少年への好意を口にした。ずっと男が苦手だと言っていたお嬢様が少しだが自分に心を開いてくれたような気がして、飛び上がるほどに嬉しくて心臓の鼓動が跳ね上がる。

「そういうことなら……アンナさんからエッチなご褒美が欲しいです……」

興奮で沸き立つ心を抑えつつブルマ姿の美少女の手の甲に自分の手のひらを重ねた。

「いいわよ……アンナとエッチさせてあげる……で、でも痛くしないでよ……」

「……わ、分かりました！ 絶対に優しくします……」

そう言いながら顔を近づけると、お嬢様はびっくりしたように目を丸くしたが、すぐに少年の意図を察したらしい。耳まで真っ赤になりながらもツンと澄まして、顎を少し上に反らして唇を差し出してきた。

「ちゅっ……」

触れ合うだけの軽いフレンチキス。それだけでアンナは俯いて黙り込んでしまふ。

「アンナさん……」

「ま、前からは恥ずかしいから……後ろから抱っこして……」

その身体を優しく抱きしめようとすると、背中を向けてだが、自分の方から腕の中に入ってきた。

「はい、いっぱい抱っこします……こっち向いてください……」

「べ、別に抱っこされるのが好きってわけじゃ……んっ、ちゅう、ちゅちゅっ……」

顔だけをこちらに向けてまだ何か言いたげだったお嬢様の唇を少し強引に奪う。

そして両手を脇の下から入れミルクを滴らせている美乳を驚づかみにして揉みながら甘い唇を堪能する。

「んもお……ちゅば、んちゅ……優しくって、言つたれふお……ンン〜」

いきなり激しい接吻を受けて驚いたように身体を硬くするアンナ。しかし勝ち気な性格のためかエッチしていいと言ったのに動揺しているところを見せたくないらしく、ギョツと目を閉じて大人しくペロチューを受け止めている。

「はあはあ……あつ、んっ……胸はダメえ……」

まだ先ほどの大量射乳の余韻が残っているのか、お嬢様のおっぱいは軽く揉んだだけで薄ピンク色をした先端からびゆるびゆるとミルクが溢れてきた。

普段学園で見ている体操着にブルマ姿のアンナが自分の腕の中で搾乳されながら身悶えしている。その刺激的なシチュエーションに加え、髪の毛から漂う甘い香りや全身で感じる彼女の体温が興奮をさらにかき立てた。

「アンナさん、僕もう我慢できないですっ……」

欲望を抑えきれなくなった正也はお嬢様を背後から抱きしめたまま、そっとベッドの上
に押し倒していく。

「わ、分かったから……ちょっと落ち着きなさいってばあ……」

四つん這いの格好をさせられ恥ずかしそうに声を上げるアンナ。いつも強気な彼女が不
安げに見上げてくるのが可愛くて、また男心をくすぐる。

「はい、優しくですね……大丈夫ですから……」

彼女を恐がらせないようにとなるべく気を遣いながら、愛撫する手を乳房からブルマに
包まれた小ぶりなヒップへと移動させていく。

少年が見慣れているムッチリとした大迫力のお尻とは違う、この両手で簡単に掴めてし
まう小尻はこれまた新しい魅力を感じた。しかもぴたりと張り付くブルマが少女のヒップ
ラインを官能的に浮かび上がらせ、特にフェチでもなかった正也ですらつい鼻息が荒くな
ってしまふ。

「本当に分かってるんでしょねっ……あ、もうっ……ちよつと、手つきがいやらしすぎ
るわよおっ……」

ブルマ越しにヒップを撫で回していると、お嬢様はくすぐったそうに身体を振る。

「すみません、どうしても触ってみたくて……嫌でしたか？」

「別に嫌ってわけじゃないけど……そんなところ触つてないで早く始めてよ……」

正直なことを言うともう少し彼女のお尻の感触を味わっていたかったが、あまり気に入ってもらえなかったようなので愛撫は中断してブルマを脱がしにかかった。

香澄たちは自分でショーツを脱いでしまうので、こうやって自分の手で下着を脱がせるというのも珍しく、胸が自然とドキドキしてくる。

「うう、あんまり見ないでよね……」

ベッドのシーツに顔を埋めて羞恥に耐えるお嬢様。

濃紺の布地と一緒にショーツが肉付きの薄い尻丘の上を通過すると、あとは力を入れなくてもスルスルと細い太ももを伝い膝まで落ちていった。

（おおっ……これがアンナさんの……）

このアングルからだとな陰もアナルも丸見えで、思わず少年の視線は釘付けにされてしまふ。

彼女の股間はまったく毛が生えておらず、ワレメは一本の筋のようにピタリと閉じている。ただおっぱいを揉まれてミルクを搾られると感じるのか、無毛の女陰はわずかに蜜で湿っていた。

「綺麗です……アンナさんのココ、すごく綺麗ですよ……」

「そ、そんなこと言われても嬉しくないわよっ……」

この屋敷に来る前の正也ならきつとオロオロして何もできなかっただろう。しかし毎日のように美女セレブたちのおっぱいを搾り、セックスに耽ってきたせいで自分でも驚くほ

ど興奮しているのに落ち着いて行動できた。

制服のズボンとパンツを脱ぎ捨てて痛いほどに勃起した逸物を取り出し、お嬢様の膣口へと狙いを定める。今からアンナの初めての相手になるんだと思うと、自然に胸が熱くなり気持ちさがさらに昂ってきた。

「あ、うっ……ま、正也、ゆっくりよ……ゆっくりしてよっ……」

完全に勃起したペニスの先端が膣口の粘膜と触れた瞬間に、アンナの身体がビクンと跳ねた。よほど緊張しているのか触れているヒップがかなり強張っているのが分かる。

これ以上お嬢様を不安がらせないように、言われた通り優しくゆっくりと勃起ペニスを処女肉に押し込んでいく。

「……ああっ！ ひいん、ま、正也が……アンナの中に挿入ってくるうっ……」

まだ亀頭の先っぽがワレメの入り口をぐぐったくらいで強烈な抵抗を受け、なかなか上手く挿入できない。

しかしそれだけでお嬢様は普段聞いたことのないような弱々しい声で喘いでいる。

「大丈夫ですか？ ゆっくりしますから……」

まだ発達中なのかお嬢様の膣内はとにかく狭く一番太いカリの部分が挿入しても、激しい締め付けが竿を襲う。それでもじわじわと腰を押し込んでいくと、ゆっくりではあるが肉棒がアンナの膣内へと呑み込まれていった。

ズブッ！ズブブ、ズリユリユウウウ……ッ!!

「ま、待ってっ……いい、痛っ……あはっ、はいっ……ひいひいんっ！」

お嬢様の涙声交じりの悲鳴とペニスが何かを突き破ったような感覚。結合部に視線をやると破瓜の証がツツつと滴り、彼女の身体が心配になる。

「大丈夫ですか……一度抜きますか？」

しかしお嬢様は涙で潤んだ瞳でキツと睨んできた。

「ダメよっ！ 正也だからアンナの大切な初めてをあげたんだから……ちゃんと最後まで受け取ってよ……」

ここで一度抜くと彼女の初体験はただ痛みを感じただけで終わってしまう。それでは中途半端になり最後までできなかつたという思い出が一生残るのだ。自分を選んでくれたアンナにそんな悲しい思いはさせたくない。

「アンナさん……ありがとうございます……僕、アンナさんこうやってエッチできて嬉しいです……」

ここまでしてもらって申し訳ない気持ちと、特別だと言ってくれる嬉しさで胸がいつぱいになり、アンナへの愛おしさが溢れてくる。

抜くのはやめて少しでも慣れればと、勃起ペニスを奥深くに挿入したままジツとしてい

ることにした。

「う、うん……ご褒美、喜んでもらえたなら……アンナも嬉しい……」



「さい……」

破瓜の痛みを和らげる方法など分からなかったが、お嬢様が可愛くて仕方なかったの
背後から覆いかぶさるようにして抱きしめる。

「ありがと、ちよつと痛みが引いてきたかも……もういいわ、正也が好きにしないとご褒
美にならないでしょ……」

まだ少し目尻に涙の粒が滲んでいるが、こんな状況でも強気な姿勢を崩さないお嬢様は
さすがというべきだろうか。

そんな強がつている姿も今では可愛くて仕方がない。

「いくらご褒美でもこういうことはお互いが気持ちよくなるしないとダメですよ……」

「正也……じゃ、じゃあ……さっきのやつ、やって……」

少年が優しく声をかけると、アンナは恥ずかしそうに呟いた。

「さっきのやつ、ですか……?」

「そう、おっぱい搾るやつ……あれ、すぐくよかったから……」

また顔をベッドに埋めてしまったのでどんな表情をしているか見えなかったが、先ほど
の乳愛撫で感じてくれていたようで嬉しくなる。

「分かりました！ おっぱいですねっ……」

少年は嬉々として脇の間から両手を滑り込ませて体操シャツからむき出しになったまま
の美乳を鷲づかみにした。

「……ああんっ！ お、おっぱいも優しくしなさいってばっ……ンはあっ！」

母親譲りの蕩けるように柔らかい乳房は少し触れただけでマシユマロのように弾み、手のひらに幸せな感触が広がる。しかも指の動きに合わせてお嬢様は肩を震わせ、尖った乳首からはミルクが溢れてきた。

「すごいですね、ミルク……」

「だ、だつて……出ちゃうんだから、仕方ないでしょっ……」

照れたように腰を振るアンナだが、やはりおっぱいを揉んでミルクを搾られると気持ちいいらしく声色が少し変化する。

「ちよつとだけ動いてみますね……」

「あ、うん……いいけど、優しくしてよ……あう、ンンっ!!」

彼女を気遣い挿入したままジツと動かさずにいたが、その間も若い男根は狭い処女肉の中でギンギンに勃起しつ放しだった。その肉棒をゆつくりと引き抜いていくと、カリが引つかり挿入する時以上の強烈な刺激が股間を襲う。

（ぐっ、すごい締め付け……こんなの初めてだよっ……）

アンナの膣内は肉ヒダなど凹凸はほとんどなく、ツルツルとしていて蜜の分泌も多く熱く潤んでいる。しかし膣肉はおっぱいのように早熟というわけではなく、ペニスを優しく包み込むというより異物に驚き激しく締め付けているという印象だった。

「あ、あぁっ……アンナの中で、動いてるのが分かるうっ……」

こうやって大人数からペニスを凝視されると、恥ずかしさはさらに増して全身が熱くなり、心臓の鼓動も大きくなっていく。

「あら、いいじゃない……それだけアタシたちの水着姿が魅力的だってことなんだから……ね、正也？」

「少し恥ずかしいですけど、正也くん喜んでもらえて嬉しいですよ……」

「うふふ、正也さんの大好きな私のおっぱいで気持ちよくしてあげますからね〜」

美女たちは仰向けに寝転ぶ少年の股間を覗き込むように下半身に群がり、自慢の乳房を見せ付けるように持ち上げる。サイズはそれぞれ違うが魅力的な乳房がズラリと並び、それはもう圧巻の光景が目の前に広がっていた。

（うわ……もう、おっぱいだらけだ……）

セレブ乳の誘惑に若い逸物は興奮を露わにしてヒクつき、先端からは透明な我慢汁を溢れさせている。

「フフ、そんなに見つめちゃって……可愛いわね……分かってるわ、アタシのおっぱい見せてあげる……」

紫は胸を辛うじて隠していた二本の紐に指をかけると、少年の視線を誘うようにゆつくと横にずらした。派手な水着の下から現れる綺麗なピンク色の尖りに、少年の視線は自然と惹きつけられる。

「あらあら〜、紫ったら大胆ね……でもおっぱいなら私も負けないわよ……」

「正也くん、わたしの胸も見てください……」

次女に続きセレブ姉妹たちもそれぞれ自分のビキニをずらして自慢のおっぱいをお披露目。思わず身を乗り出しそうになっていると、それを見て一番恥ずかしそうにしていたアンナもストラップに手を伸ばした。

「うう……胸は大きさだけじゃないんだから……」

お嬢様も水着を引き上げ、形のいい美乳を見せ付けてくる。

（すごい……みんな本当にプールで乳首丸出しにしちゃった……）

カラフルな水着から次々に生おっぱいが露わになり、勃起したペニスを取り囲んでいるのだ。そして美女たちはその自慢のセレブ乳を一斉に押し付けてくる。

「は〜い、正也さん……おっぱいで気持ちよくしてあげますからね〜」

「あら……おっぱいならアタシも負けないわよ……」

——むにゅん！ むにゅ、むにゅうう〜ッ!!

日本人離れた爆乳が包み込むようにペニスに押し付けられ、温かくて柔らかい幸せな感触が股間に広がっていく。

「もう、ママも紫さんもおっぱいデカすぎよ……」

「わたしのおっぱいだって、正也くんはいつも綺麗だって言ってくれます……」

その迫力に圧され気味になりつつも、彩花やアンナも負けじと自分たちの乳房を突き出してきた。場所はほとんど爆乳組に占拠されているが、若くて弾力ある美少女たちのおっ

ばいは淑女たちの乳房を押しつけるようにしてペニスまで届いてくる。

「う、うわあつ……こんなにいつぺんにおっぱいを押し付けられたら……」

サイズや柔らかさなどは違えどみんな魅力的な乳房を四方から同時に押し付けられ、ペニスは完全に埋もれてしまった。

視覚的な興奮もすごいが、先汁を垂らし敏感になっている逸物を乳肉で覆い尽くされ包み込まれる快感はまさに圧巻。気持ちよすぎて逸物は身震いをする。

「すごく熱くなつてますね……正也くんのここ……」

「うふふ……正也さんつたら私の胸の中でビクビク震えてるわ……」

硬くなったペニスを乳肌で感じ美女たちも熱っぽい吐息を漏らした。

「アンナだつて……ん、んっ……」

しかし爆乳巨乳に押されてしまいアンナは思うように自慢の美乳を押し付けられないらしく、身体を乗り出すようにしておっぱいを揺らしてくる。

おかげで股間の上でひしめき合つてる乳房同士がぶつかり合い、ぐにぐにと淫らに形を変え柔らかそうに弾んだ。

「こら、暴れないの……パイズリっていうのはこうやるのよ……」

クールに姪っ子を嗜めながら紫は乳房を抱え直すと中央に寄せ上げ、先端をペニスに擦り付けるようにゆつくりと上下に動かし始める。

「ちよ、ちよつと紫さんつ……いきなり動かさないてください……」

包まれているだけでも十分すぎるほどに気持ちよかったのに、そのモチモチとした乳肉でペニスを扱かれると思わず射精しそうなほどの快感が股間を襲う。

「あ〜んっ……もう、紫ったら……独り占めはさせませんよ……」

さらに一番大きなバスの持ち主である香澄までおっぱいを揺らし始めたせいで、股間の上に押し付けられていた四人の乳房が一斉に波打った。

ムにゅん、むにゅん！ たぶ、たぶたぶっ……むにゅうううう〜ッ！！

「……きゃん！ 姉さんたち、もう少し優しくしてくださいっ……」

「そ、そうよ……これじゃあアンナたちが全然できないじゃないのよお……」

お嬢様たちはサイズ差に苦労しながらも、必死に胸を反らして張りど弾力で勝る乳房を押し付けてくる。しかし香澄や紫も負けじと重量感たっぷりの乳房で押し返してくるせいで、刺激的な水着からむき出しになった生おっぱいたちが押し合いへし合いしながら揺れ踊りまくった。

おかげでその中心でもみくちゃにされているペニスはさらに乳房が強く擦り付けられ、幸せな乳圧の快感に腰が震える。

「んふ……こうやって胸同士を擦り合わせるのも、感じちゃうわね……」

乳房を擦り続けるのはやはり大変らしく、気づくと美女たち全員が息を弾ませて熱っぽい吐息を漏らしていた。普段クールな紫も頬が上気している。

「はあ〜ん、んっ……大変、私ったらミルクがっ……」

しかも乳房を硬く勃起したペニスとライバルたちのおっぱいと擦り合わせているうちにパイザリの刺激で感じてきたらしく、一際甘ったるい声を上げて喘ぐ香澄。

その嬌声と共に両手で抱える爆乳の先端から白いミルクが噴き出してくる。

びゅるっ！　びゅるるっ！　ぷしゅ、びゅううっ！

「あぁっ……香澄さんのミルク温かくて気持ちいいっ！」

水だけでなくミルクで濡れた美女たちのおっぱいは潤滑がよくなり、ヌルヌルと互いの乳肉と擦れ合いながらさらにリズムよくペニスを抜く。

温かくて柔らかい乳房の感触に新たな快感が加わり、股間に流れ込んでくる快感は一気に増した。ミルクのおかげで乳肌はさらに心地よくなり、慌てて射精を堪えようとすると自然と腰が浮き上がってしまう。

「アタシも胸が張ってきちゃったわ……ン、出るっ……」

重量感たっぷりの爆乳をコントロールするため両手で強く押し付け、揉み搾るように揺らしていたせいで紫のおっぱいからもミルクが溢れてきた。

「恥ずかしいですっ……わたしもミルクが止まらないです、んんっ……」

「きゃっ！　そんなに押し付けられたらアンナも出ちゃうじゃないっ！」

すると彩花やアンナも射乳し、股間はたちまちミルクでびしょ濡れになってしまふ。

プールの水で濡れたおっぱいはキラキラと輝いていたが、ミルクでさらに白く染まった乳肌は淫らな化粧を施したかのように官能的な雰囲気漂わせる。

「うわ、ちょっと待ってください……はぁあつ……」

珠のようにスベスベだった乳肌がミルクのおかげでさらになめらかになり、幸せな乳圧が包み込むようにペニスを扱く。四人のおっぱいでもみくちやにされた逸物はその心地よさに歓喜し、血管を浮かび上がらせながら脈動する。

「フフ、我慢しないでいいのよ……アタシのおっぱいが一番気持ちいいでしょう？」

濡れた髪や首筋に頬に張り付き色気の増した紫が息を弾ませながら熱っぽい視線を向けてきた。しかしそれを周りの美女たちが黙って見ているはずもなく、ミルクまみれになった乳房を擦り付けながら声を弾ませる。

「そんなことないですよね……ん、正也さんは私のおっぱいが大好きですものね？」

「……ま、正也くん、わたしの胸は気持ちよくないですか？」

「ちよつと、アンナを忘れないでよね！ アンナだって頑張ってるんだから……」

美女たちはおっぱいを揺らしてペニスに擦りつけながら、今日のミルク搾りの相手に選んでもらうためにと必死にアピールしてきた。

「うう、そう言われても……み、みんなですつ……みんな気持ちいいです！ もう、射精しちやいそうです！」

しかしさすがに四人同時におっぱいを押し付けられると、勃起したペニスも完全に乳肉に埋もれてしまい、どれが誰の乳房かも分からない状態である。

ずちゅっ！ にちゅ、にゅるんっ！ ずちゅずちゅ……ずちゅうううッ！！

ミルクで濡れた乳肌と勃起男根が擦れ合う度に淫らな水音がプールサイドに響き続けた。とにかく温かくて柔らかい乳圧に包まれ、ミルクで濡れた乳肌で扱かれ、今にも射精しそうなほど気持ちいい。

「あ、ああっ……もう、出そう……ううっ！」

この大迫力の光景をもっと見ていたかったし、贅沢すぎるミルクパイズリの快感をずっと味わっていたかった。しかし腰が蕩けるかと思うほど気持ちいいおっぱいを四人が同時に擦り付け続けてくる。

水着から溢れたミルクおっぱいが揺れ踊る度に射精がどんどん近づいてきて、こんな状況でそう長く耐えていられるはずもなかった。

無意識のうちに腰が浮き上がる。自分からおっぱいの中にペニスを擦り付けるように突き込んでしまい、激しい快感が股間に走った。

「で、出る！ イクっ、イクイクっ……あああゝゝっ!!」

情けない声を上げながら、ついに少年は絶頂に達してしまふ。

ビュルッ！ ドビュ、ドビュ！ ビュビュ、ビュウウウウッ!!

「——きゃっ！」

突然の射精に美女たちは小さな悲鳴を上げる。

すっかりペニスを覆い尽くしている乳房の中心でわずかに顔を覗かせている逸物の先端からは勢いよく射精を噴き出した。放たれた白濁液はミルクで濡れたおっぱいにビチャビ



チャと降り注ぐ。

「あぁんっ、熱うい……正也さんの精液がこんなに……」

「フフ、たくさん出したわね……そんなにアタシのおっぱいがよかったのかしら？」

香澄と紫はどこか恍惚とした表情を浮かべ胸の谷間に埋もれヒクついているペニスを見つめていた。

「感じてくれたんですね……嬉しいです……」

「ちよつとお……いくらなんでも出しすぎじゃないの……」

その隣では恥ずかしそうに頬を染めている彩花とアンナ。しかしみんな嫌そうな顔一つせずに乳房で無節操な射精を受け止めている。

偶然の巡り合わせがなければ、本来自分とは住む世界の違う華麗なるセレブ一族の美女たちがわざわざ水着姿で乳奉仕をしてくれたのだ。そこまでしてくれる優しさと好意が嬉しくて、胸が肉悦だけでなく温かい感情で満たされていく。

「……それで結局正也は誰の胸が一番だったのよ？」

「え？ ですからみんな……」

射精後の心地よい脱力感に浸っていたら、アンナがタオルで乳房を拭いながら思い出したようにツリ目を向けてきた。

「みんなじゃ困るわ。アタシの胸を選んでくれなくちゃ……ね、毎日搾りたくなるでしょう？」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!